

## 抒情詩の主体

新井美智代

## はじめに

抒情詩の鑑賞や分析では、〈抒情詩の主体 (лирический субъект)〉という表現がしばしば用いられる。この〈抒情詩の主体〉とはいったい何なのだろうか。主体的に詩を創造している作者だろうか。それとも詩の中に現れる〈私〉だろうか。あるいは詩の中に描かれる人物だろうか。

И. С. Кадочниковаは、アルセーニー・タルコフスキーの詩「雨」について次のように述べている。

イングル川の畔の木のように  
美しく、瘤のあるこの全世界  
そこで私は耳にした、雷雨の最初の轟きを

雷雨は頑丈な木の幹を  
羊の角の形にたわめ、私は見た、その梢を  
雷雨のうなりの緑の押型を

雨は粘土の斜面を駆けおり  
降り注ぐ矢に追われ、角のように枝分かかれし  
もはやアクションのようだ

それは私の足もとの道半ばで消えた

「雷雨のうなり」に「緑」という色彩的特徴が与えられ、それは、そのうなりが、抒情詩の主体の内的な眼差しの前に広がる、情景という事実になることを可能にしている。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> Кадочникова И.С. Синтез искусств и его роль в формировании нового принципа художественного психологизма в русской лирике второй половины XX века (на материале творчества Арсения Тарковского) // Вестник Удмуртского университета. Серия «История и филология». 2010. Вып. 4. С. 116.

この〈抒情詩の主体〉は、その眼前で木がたわみ、雨が斜面を流れ落ちる情景が広がっている、そのような存在だ。従ってこの主体は詩の中の〈私〉に他ならない。そしてその〈私〉は、単純に考えれば、詩人アルセーニー・タルコフスキーである。

物語論では〈作者〉と〈語り手〉は厳密に区別される（もちろん現実の経験的作者と作品を構築する意識としての〈作者〉も区別されねばならない）。その〈語り手〉にもさまざまなタイプがあることには多くの研究者が言及しており、たとえば F. シュタンツェルは、一人称の語り手が作中人物である《〈私〉の語る物語状況》、語り手が物語世界の外にいる〈局外の語り手による物語状況〉、作中人物の意識を通して物語の現実が映し出されるが、その人物すなわち〈映し手〉は読者に語りかけない〈作中人物に反映する物語状況〉という三つの状況を挙げ、実際の物語はそれらの典型的状況の間のさまざまな位置にあることを類型円図表で示した。<sup>2</sup>

抒情詩の発話の担い手である〈抒情詩の主体〉も、作品内におけるその現れ方は多様である。その主体の多様なありかたに多くの研究者が注目し、慣用的に用いられている用語を明確化し、あるいは新たな名称を付与した。小論では Л. Я. Гинзбург、Б. О. Коэрман、С. Н. Броитман という三人の研究者を取り上げる。〈抒情詩の主体〉に対して彼らが用いた用語を簡単に示そう。

#### ギンズブルク

1. 〈抒情詩の主人公 (лирический герой)〉<sup>3</sup>：一連の詩作品から浮かび上がる人物像。
2. 〈抒情詩の《私》 (лирическое я)〉：詩を創造する主体、あるいは個我。

#### コэрман

1. 〈本来の作者 (собственно автор)〉：出来事を描写し、状況について思いを巡らせるが、自分自身は描写の客体ではない。
2. 〈語り手である作者 (автор-повествователь)〉：自分とは異なる人間やその運命について語るが、自分自身は描写の客体ではない。
3. 〈抒情詩の主人公〉：意識の担い手であると同時に、描写の客体でもある。
4. 〈役割的抒情詩の主人公 (герой ролевой лирики)〉：作者である詩人が、自分とは別の人物に成り代わって発話を担う詩の主人公。

---

<sup>2</sup> フランツ・シュタンツェル（前田彰一訳）『物語の構造』岩波書店、1989年、7-13頁。

<sup>3</sup> лирический герой という用語はトニャノフが最初に用いたことを、ギンズブルクとブロイトマンが記している。Гинзбург Л. О лирике. М., 1997. С. 151.; Броитман С.Н. Лирический субъект // Чернец Л.В. (et al.) Введение в литературоведение. Литературное произведение : основные понятия и термины. М., 1999. С. 147.

## ブロイトマン

1. 〈語り手である作者〉：作品中に一人称の代名詞が現れない詩の、発話の担い手。
2. 〈本来の作者〉：作品中に一人称単数あるいは一人称複数の代名詞の形で登場するが、彼自身は描写の客体ではない。
3. 〈抒情詩の《私》〉：作品中に一人称単数の代名詞で現れる独立した人物像。
4. 〈抒情詩の主人公〉：自身が作品のテーマである主体。
5. 〈役割的抒情詩の主人公〉：作者である詩人が、自分とは別の人物に成り代わって発話を担う詩の主人公。

小論はこれらの用語を比較し、共通点と違いを明らかにし、さらにはその問題点を示すことを目的としている。また上述したシュタンツェルによる物語の語り手の類型とも関係付けたい。まずギンズブルクの使用語を詳しく見てみよう。

## 1. ギンズブルクの〈抒情詩の主人公〉と〈抒情詩の《私》〉

ギンズブルクは、抒情詩における個我（личность）の問題を取り上げ、十九世紀の抒情詩、とりわけレールモントフの作品について論じる際には〈抒情詩の主人公〉という用語を繰り返し用いている。その〈抒情詩の主人公〉について、ギンズブルクは次のように述べている。

真の抒情詩には必ず詩人の個我が存在しているが、〈抒情詩の主人公〉について語ることが意味を持つのは、その詩が確固たる特徴を——伝記的、プロット的特徴を——まとっている場合だ。<sup>4</sup>

〈抒情詩の主人公〉は単に無色透明な傍観者として出来事や人物を描写するのではなく、自身が主要なテーマであり、具体的な人物像を備えている。ただし、「〈抒情詩の主人公〉は個々の詩作品には存在しない。それは必ず、全作品でないにしても、ある時期、連作、同一テーマの作品群の統一性なのである」。<sup>5</sup>

またギンズブルクは、ベリンスキーがレールモントフの様々な詩の中に統一性を見いだしたことを伝えている。『それ（戯曲『一月一日』—リディヤ・ギンズブルク）を読むと、我々は再びまったく新しい世界に入り込むが、それ以前の作品におけるのと同じ考え、同じ心、要するに同じ個我を見いだす』。レールモントフの作品集には様々なトーンの詩が

<sup>4</sup> Гинзбург. О лирике. С. 146.

<sup>5</sup> Там же.

あるが、それはジャンルが異なるのではなく、同一の強力な個我の、内的な生の様々な側面なのである」<sup>6</sup>

そしてレールモントフの「祈り」の柔和さ、優しさ、暖かく女性的な感覚が、強く尊大な精神においては感動的以上だという解釈を紹介し、ペチョーリンもレールモントフ自身もその人間性や情熱を注意深く隠していると述べたうえで、次のように続ける。

これらの相関関係のなかから〈抒情詩の主人公〉は出現する——それは、テキストの背後に存在しているだけでなく、プロットの性格づけもなされているが、だからといって**登場人物像**と同一視してはならない、個我の統一性なのである。<sup>7</sup>

テキストの背後に存在する個我の統一性であるのなら、それは作者つまり詩人そのもののように思えるが、〈抒情詩の主人公〉は、現実の詩人とは別の存在である。

〈抒情詩の主人公〉は二面的だ。それが出現したのは、読者が抒情詩の個我を感じ、それと同時に、その個我の分身が生そのものの中に存在すると仮定したときである。ここで問題にしているのは読者の恣意的解釈ではなく、所与の詩人の芸術体系に置かれた二重の知覚作用だ。しかもこの抒情詩の分身、詩人のこの生きた個我は、矛盾とその現れ方が無秩序に満ちた形で捉えられる経験的、伝記的個我ではない。<sup>8</sup>

一方、〈抒情詩の《私》〉<sup>9</sup>についてギンズブルクは「レールモントフの〈抒情詩の私〉は統合的だが、それには疑いなく〈抒情詩の主人公〉の概念が当てはまる」<sup>10</sup>と述べている。つまりレールモントフに関しては〈抒情詩の《私》〉と〈抒情詩の主人公〉は重なり合っている。しかし両者は同一ではない。上述の引用は、次のように続く。

作者の意識の統一性、それが一定の問題領域や雰囲気集中していることが、〈抒情詩の主人公〉が出現する必要条件だ。必要ではあるが、まだ十分ではない。例えばフェートの詩は抒情的トーンの統一性で際立っており、しかもその起源からしてロマン主義的な統一性である。だがそれでもフェートの〈抒情詩の主体〉を理解するためには〈抒情詩の主人公〉とい

---

<sup>6</sup> Там же. С. 147.

<sup>7</sup> Там же. С. 148.

<sup>8</sup> Там же. С. 151.

<sup>9</sup> лирическое «я» (ドイツ語で Lyrisches Ich) という用語を初めて学術的著作に導入したのはマルガレーテ・ズスマン (Margarete Susman) だが、それ以前にアンネンスキーが使用していた、とブロイトマンは指摘している。Бройтман. Лирический субъект. 1999. С. 146.

<sup>10</sup> Гинзбург. О лирике. С. 149.

う用語は余計である。それは何もつけ加えず、何も説明しない。なぜならばフェートの詩において個我は、愛や自然というテーマが屈折する作者の意識のプリズムとして存在しているが、自立したテーマとして存在しているのではないからだ。レールモントフの抒情詩の個我は、主体であるだけでなく、作品の客体、そのテーマでもあり、それは詩のプロットの展開そのもののなかで明らかになるのである。<sup>11</sup>

ここでのフェートの「詩の個我」やレールモントフの「抒情詩の個我」は〈抒情詩の《私》〉とほぼ同義に用いられている。従ってフェートの〈抒情詩の《私》〉はテーマを屈折させるプリズムとしては機能するが、それ自体は自立したテーマではないのに対し、レールモントフの〈抒情詩の《私》〉は、それ自体が作品の主体であると同時にテーマでもある。

ギンズブルクの〈抒情詩の《私》〉は、詩を作る主体、あるいは個我である。しかしその客体性、テーマ性は詩人によって大きく異なる。

## 2. コールマンによる〈抒情詩の主体〉の分類

コールマンは、ギンズブルクによる抒情詩の研究を評価したうえで、〈抒情詩の主体〉をさらに細かく分類した。それは主としてネクラソフの詩を題材になされているが、〈抒情詩の主体〉という用語は用いておらず、「作者の意識の基本的な表現形式の特徴づけ」<sup>12</sup>をし、その意識に、〈本来の作者〉、〈語り手である作者〉、〈抒情詩の主人公〉、〈役割的抒情詩の主人公〉という4種類の名称を与えている。

### 2-1. 〈本来の作者〉

コールマンが提唱した〈本来の作者〉とは何か。それは「何らかの光景を目にし、出来事を描写し、状況について思いを巡らせる存在だ。読者が詩作品を感知するさい、その注意は主に何が描写され、何について語られているかに向けられる」。<sup>13</sup> すなわち〈本来の作者〉が発話を担う詩作品では、あくまでも描かれるものや出来事が重要なのであって、読者は作者にほとんど注意を向けない。

しかし〈本来の作者〉の現れ方の程度には幅がある。まず〈本来の作者〉が自らを指す一人称の代名詞が作品内に現れないものがある。コールマンが例として挙げているネクラソフの「雨になるまえに」の第一連と第二連を引用する。

<sup>11</sup> Там же. С. 149-150.

<sup>12</sup> Корман Б.О. Лирика Некрасова. Ижевск. 1978. С. 42.

<sup>13</sup> Там же. С. 43.

雨になるまえに

もの悲しげなうなり声をあげて、風は  
空のはてへと 黒雲の群れを駆り立てる。  
折れ曲がったもみの木はうめき、  
暗い森は、うつろにささやいている。

さざ波を立て まだらに反射する川面に、  
木の葉が木の葉を追って舞い落ちる。  
乾いたすどい冷気が  
流れとなって走る。<sup>14</sup>

このように「雨になるまえに」では発話の主体は最後まで自分の姿を表さず、淡々と情景を描写する。これは小説に平行例を探すならば、〈私〉として発言することのない局外の語り手だろう。

〈本来の作者〉は一人称複数の代名詞の形で登場することもあるが、その場合、意識の担い手は個人ではなく、雑階級の労働者たちや人間一般など、ある統一体を網羅的に表している。<sup>15</sup> ネクラースフの「偉大な感情よ！」に登場する「私たち」は、詩人とそれを取り囲む人々だけではなく、人間一般を指し示すのだ。

偉大な感情よ！ この国のどこに行こうとも  
どの家の戸口でも 耳にするのは  
遠くから 母を呼び求める子どもたちの声と  
子どもたちに駆け寄ろうとする母  
偉大な感情よ！ それを死ぬまで、  
私たちは心に生き生きともちつづける  
私たちは姉妹を、妻を、父を愛する  
だが苦難のとき思い出すのは母のこと！<sup>16</sup>

---

<sup>14</sup> Некрасов Н.А. Собрание сочинений в восьми томах. Т. 1. М., 1965. С. 71.

<sup>15</sup> Корман. Лирика Некрасова. С. 43.

<sup>16</sup> Некрасов Н.А. Собрание сочинений в восьми томах. Т. 2. М., 1965. С. 383. なおネクラースフの作品は全て同じ選集を参考にしているので、以後巻数とページのみを示す。

〈本来の作者〉が「戦争の恐ろしさや」のように一人称単数の代名詞で登場することもあるが、その場合でも〈私〉の自己性格描写は重要ではない。重要なのは客観的な形の結果、私性を持たない観察や思索なのである。<sup>17</sup>

戦争の恐ろしさや  
 戦いのたびの新しい犠牲者のことに耳を傾けながら  
私が憐れむのは友でも、妻でもなく  
私が憐れむのは当の英雄でさえもない<sup>18</sup>

このように〈本来の語り手〉は〈私〉や〈私たち〉の有無という形式的な指標ではなく、それが出来事を傍らから描写していること、〈私〉という形で現れようとも、局外の語り手のような存在であることが重要なのだ。ただしその判断が困難な場合も少なくないだろう。

## 2-2. 〈語り手である作者〉

次に〈語り手である作者〉だが、「それは自分とは別の人間やその運命について語る。ここでも〈本来の作者〉が登場する詩作品と同じく、読者の注意はほとんど描写の客体に向けられる。[...] 読者が注意を向けるのは、誰が描写されているのか、誰について語られているのかであって、語っている人間のことはまったく気付かないこともある」。<sup>19</sup> 例としてネクラーフの「占いをする花嫁」などが挙げられている。

占いをする花嫁

彼のマナーは上品で  
 愚かでもなく、貧しくもなく、美男子だ  
 何を占うことがあるのです？ 貴女は彼にぞっこんで  
 運命から逃れることなどできないだろう

占わなくとも私は言える  
 彼の胸に愛情があるのなら  
 貴女を試練が待っているかも知れないけれど

<sup>17</sup> *Корман. Лирика Некрасова. С. 44.*

<sup>18</sup> *Некрасов. Т. 1. С. 243.*

<sup>19</sup> *Корман. Лирика Некрасова. С. 46.*

幸福もまた未来にあるだろう...<sup>20</sup>

〈語り手である作者〉も〈本来の語り手〉と同様、局外の語り手のように描かれる世界の外側から対象を見つめる。両者の違いは、〈語り手である作者〉が主として一人の人間に焦点を当て、その運命について思索するのに対し、〈本来の作者〉が語る詩では、人間よりも出来事に重きが置かれることである。

またコールマンは「彼〔語り手である作者〕が語る運命は、歴史的展望のなかに置かれない。本来の作者でまとめられる詩作品は、歴史と民衆の運命という大きな世界に関与しているだけではない。ここにはつねに歴史的展望が存在する」<sup>21</sup> という違いも指摘している。

### 2-3. 〈抒情詩の主人公〉

〈本来の作者〉及び〈語り手である作者〉と、〈抒情詩の主人公〉の基本的な違いは、それが「意識の担い手であると同時に、表現の客体でもある」<sup>22</sup> 点にある。「読者の注意は主として、抒情詩の主人公はどんな人物か、彼に何が起きているのか、彼の世界に対する関係はどうか、などに向けられる」。<sup>23</sup>

では〈抒情詩の主人公〉が表現の客体であるということは、どのような表現上の特徴によって示唆されるのだろうか。それは「日常生活の、そして伝記的相貌が一定程度、明確化されている」<sup>24</sup> ことだとコールマンは言う。それがどのようなことなのか、コールマンが示すネクラースフの〈抒情詩の主人公〉を見てみよう。

ネクラースフの「故郷」には、地主屋敷で暮らした少年時代の思い出が——暴君的な父親、その父によって憎しみと恥じ入ることを学んだ自分、父親に虐げられた母親、善良な乳母が——事細かに描かれている。

この主人公はやがて故郷を離れ、貧しい生活を強いられる。「夜の暗い通りを歩き」、「最後のエレジー」「君の墓を訪ねた」には、つらい仕事、放浪、病患が描かれる。また孤独もネクラースフの〈抒情詩の主人公〉が持つ特徴的な属性だ。

君の浅黒い可愛い顔は  
今どこで誰に笑いかけているのだろう  
ああ、完全なる孤独よ！

---

<sup>20</sup> Некрасов.. Т. 1. С. 237.

<sup>21</sup> Корман. Лирика Некрасова. С. 48.

<sup>22</sup> Там же.

<sup>23</sup> Там же.

<sup>24</sup> Там же.



約束する人もいない！

夕方になると喜んで  
私のところへ来たものだった。  
二人でいるとどんなに私たちは  
のんきで、楽しかったことか！

君はどれほど生き生きと  
やさしい感情を表したことか！  
覚えているかい、君はとくに  
私の歯が気に入っていたことを。

どんなに君はその歯に見とれ  
どんなにやさしく口づけしたことか  
だがその歯をもってしても  
私は君を引き留められなかった...<sup>25</sup>

このように一連のネクラーツフの抒情詩からは、地方の地主貴族の家に生まれながら父親の横暴さ、そして周囲の貧しさと無知に苦しみ、やがて故郷を捨て、貧しく孤独な生活を送る人物像が立ち現れる。ギンズブルクが記したように、それは連作や同一時期ないしは同一テーマの作品群から生じるのである。ただし、この人物像は、現実のネクラーツフそのものではないことは強調しておこう。

#### 2-4. 〈役割的抒情詩の主人公〉

コールマンが示した発話の主体のなかで、他のタイプと明瞭に区別されるのが〈役割的抒情詩の主人公〉だ。〈役割的抒情詩〉とは、作者である詩人が、自分とは別の人物——架空の人物や、歴史上あるいは伝説上の人物——に成り代わって、発話を担う詩のことである。その意味では〈役割的抒情詩〉というよりも〈成りきり抒情詩〉という訳語の方がふさわしいかも知れない。

この抒情詩の例としてコールマンが挙げているのは、コリツォフの「刈り手」、「農夫」、「勇み肌」、ネクラーツフの「カテリーナ」、「カリストラート」である。

---

<sup>25</sup> Некрасов. Т. 1. С. 241.

カリストラート

わたしの揺籠をゆすりながら  
母さんはわたしのために唄ったものだ  
「幸せになるよ！ カリストラージュカ  
おまえは気楽な生活を送れるよ！」

神のみ心によって  
母さんの予言は的中した  
カリストラージュカよりきれいな者も  
着飾っている者も豊かな者もいやしない！

泉の水でみずあびし  
五本の指で髪をとき  
種もまけない耕地から  
収穫を待っている

だがかみさんはやっている  
裸の子どもたちのための洗濯を  
夫をできるだけよく着飾らせ  
二重編み底の樹皮のわらじをつけさせる！<sup>26</sup>

この詩では作者は貧しい農民カリストラートに成り代わって自らの境遇を自嘲的に描いている。カリストラートは物語世界内で中心的な位置にいる一人称の語り手のように機能する。〈役割的抒情詩〉は作者が自分とは異なる人物を作りあげ、それに語らせているという意味において、抒情詩でありながら小説に近い特徴を備えている。

### 3. ブロイトマンによる〈抒情詩の主体〉の分類

ブロイトマンは、まず抒情詩の主体の歴史の変遷を概観した後、近代の抒情詩の主体を分類する。その際、基本的にはコールマンの用語を踏襲した上で、さらにもう一つのタイ

---

<sup>26</sup> Некрасов. Т. 2. С. 74.

プ〈抒情詩の《私》〉をつけ加えた。また抒情詩では〈作者〉と〈主人公〉が同一視されがちだが、作品を作る意識としての〈作者〉と、それによって作りあげられた〈主人公〉とを二つの極と捉え、その両極の間に抒情詩の主体の5タイプを並べた。

### 3-1. 〈語り手である作者〉と〈本来の作者〉

ブロイトマンが〈作者〉の位置にもっとも近い主体としたのが〈語り手である作者〉と〈本来の作者〉である。〈本来の作者〉というコールマンの用語をブロイトマンは「作者と主人公の同一化を促す」<sup>27</sup> のでふさわしくないとした上で、便宜上これらの用語を用いている。「作者と主人公の同一化」を批判する上で拠り所としているのは、ブロイトマンが紹介しているバフチンの説である。

抒情詩において、作者は、外的には音響の、内的には絵画的・彫刻的およびリズム的形式の中に溶け込んでしまい、それゆえ作者は存在しないように、作者は主人公と溶け合っているように、あるいは逆に主人公が存在せず、作者だけが存在するよう感じられる。実際には抒情詩においても作者と主人公は互いに対峙し、一つ一つの言葉の中に、リアクションに対するリアクションが響いている。<sup>28</sup>

またブロイトマンの定義はコールマンのものとは異なる。上述したように、コールマンによる定義では、〈本来の作者〉は情景や出来事を、〈語り手である作者〉は人物をテーマとしている。他方、ブロイトマンによれば、二つの主体の違いは、発話の担い手が代名詞の形で作品中に現れるか否かである。

ブロイトマンの〈語り手である作者〉の特徴は、発話の主体が文法的には表現されないこと、つまり一人称の代名詞が現れないことである。このように「話している人物が声のみであるような詩においては [...] 話し手が作者と主人公に分岐していないというイリュージョンが創り出され、作者自身は、創造物のなかに神が溶け込んでいるように、自分の作品のなかに溶け込む」。<sup>29</sup> 例としてプーシキンの「アンチャール」が挙げられているが、ここでは最初の二連を引用する。

<sup>27</sup> Бройтман. Лирический субъект. С. 144.

<sup>28</sup> Бахтин М.М. Автор и герой в эстетической деятельности // Работы 1920-х годов. Киев, 1994. С. 79.

<sup>29</sup> Бройтман. Лирический субъект. С. 145. ここにも先に引用したバフチンの考えが反映されている。

アンチャール

草木もまばらな荒野が原の  
暑さにやけただれた草の上に  
いかめしい見張りの兵の姿にも似て  
アンチャールは独りそびえ立つ

渴いた荒野の自然は  
怒りの日にこの樹をつくり  
その根とかぐろき緑の枝とに  
毒の汁を吸わせた<sup>30</sup>

「アンチャール」の〈語り手である作者〉は、最後まで〈私〉として登場することはない。それは描かれる物語世界の外にいて世界内の人物や事物を三人称で指し示し、自身は姿を現さない局外の語り手のような存在だ。

次にブロイトマンが定義する〈本来の作者〉は、〈語り手としての作者〉とは異なり、テキスト内に一人称単数あるいは複数の代名詞の形で登場する。だが、彼自身は描写の客体ではない。描写されるのは彼自身ではなく、何らかの出来事、事態、状況、現象である。例としては、フェートの「すばらしい景色」と「嵐の前」、K. スルチェフスキーの「落葉」などが挙げられている。

すばらしい景色  
君はどれほど私にいとおいしいことか  
白い平原  
満ちた月

高い空の光  
そして輝く雪  
遠い櫓の  
孤独な走り<sup>31</sup>

---

<sup>30</sup> *Пушкин А.С. Собрание сочинений в десяти томах. Т. 2. М., 1959. С. 229-230.*

<sup>31</sup> *Бройтман. Лирический субъект. С. 145.*

この詩で重要なのはすばらしい景色であって、それを見つめて感動している〈私〉ではない。読者は〈私〉の知覚をとおして美しい景色を感じるが、〈私〉の存在はほとんど意識されない。この〈私〉は物語世界内にいて、その知覚や思考で出来事を伝える〈映し手〉に対応する。

### 3-2. 〈抒情詩の《私》〉

ブロイトマンが抒情詩の発話の主体として導入した〈抒情詩の《私》〉は、それまで一般的に理解されてきた意味——文字通り詩の中に《私》として登場する人物——ではない。それは作品内に《私》として登場するが、しかしやはり《私》として現れる〈本来の作者〉とは異なる。両者の違いは、〈抒情詩の《私》〉が「即自的主体、独立した人物像」<sup>32</sup> だという点にあると言う。しかし両者の区別が極めて難しいことはブロイトマン自身も認めているが、その基準は「直接的な評価の視点がどれほど強調されているか、能動的であるかというその程度」であるというコールマンの説明が引用されている。<sup>33</sup>

この人物像は現実の作者に近い場合もあるが、それとは「根本的に区別されねばならない [...], なぜならばそれは詩人に与えられた《私》から創り出された表現形式だからだ」。<sup>34</sup> そしてアンネンスキーによるバリモントの「私は一ロシア語のゆったりとした発話の優雅さ…」の解釈を引用し、〈抒情詩の《私》〉と現実の作者を区別することの重要性を示した。

この詩の〈私〉は、「詩という仮面をつけた K. D. バリモント自身ではまったくない」。アンネンスキーによれば、〈抒情詩の《私》〉は、「個人的なものでも普遍的なものでもなく、なによりもまず詩人によってのみ認識され表現される私たちの〈私〉である」。彼の別の定式化によるならば、「私たちが直感的に再現することができるこの〈私〉は、外面的な、いわば伝記的な作者である〈私〉というよりも、むしろ分解不可能な真の〈私〉、本質的に私たちが詩の中で、私たちの〈私〉に合致するものとして、唯一体験できる〈私〉なのである」。<sup>35</sup>

ブロイトマンは、〈抒情詩の《私》〉は情景や出来事を見つめてそれを言葉で表現するだけの〈本来の作者〉とは異なり、主体的な人物像を備えている、と述べている。この人物像は作者が創造したものである以上、現実の作者とは区別されねばならない。では〈抒情詩の《私》〉と次の〈抒情詩の主人公〉との違いはどこにあるのだろうか。

<sup>32</sup> Там же. С. 146.

<sup>33</sup> Там же.

<sup>34</sup> Там же.

<sup>35</sup> Бройтман. Лирический субъект. С. 146-147. 「 」内はブロイトマンによるアンネンスキーからの引用。

### 3-3. 〈抒情詩の主人公〉

〈抒情詩の《私》〉よりもさらに〈主人公〉寄りに位置するとされるのが〈抒情詩の主人公〉である。この主人公と、「これまで見てきたタイプとの本質的な違いは、それが《即自的主体（субъект-в-себе）》であるだけでなく、《対自的主体（субъект-для-себя）》であること、つまり彼が自分自身のテーマになり、したがって〈抒情詩の《私》〉よりも明瞭に一次的作者から区別される」<sup>36</sup> ことにある。〈抒情詩の主人公〉が特徴的な詩人としてブロイトマンは、レールモントフ、ブローク、ツヴェターエワ、マヤコフスキー、エセーニンを挙げている。しかし「自分自身のテーマ」になっているか否かというのは抽象的で、これだけでは〈抒情詩の《私》〉との差異が理解しにくい。ほかに両者の違いは無いのだろうか。

すでに引用したように、ギンズブルクによれば、〈抒情詩の主人公〉は個々の詩作品には存在せず、複数の作品から浮かび上がる像である。ブロイトマンも、「〈抒情詩の主人公〉は個々の詩においても識別され得るが、十全にまた明瞭にそれが見いだされるのは詩集、あるいは連作においてである」<sup>37</sup> と述べている。つまり彼らにとっての〈抒情詩の主人公〉とは、個々の作品の〈私〉というよりも、関連した複数作品の背後に浮かび上がる人物像なのである。

また〈抒情詩の主人公〉は、その伝記的特徴が具体的なプロットのなかで表現され、その結果、現実の作者を想起させるので、〈作者〉と〈主人公〉という二極の間で、主人公側の近くにいながら、現実の作者と同一視されやすいという逆説的なことが起きる。

ところでブロイトマンは、ギンズブルクとコールマンが、「〈抒情詩の主人公〉は主体であるだけでなく、自分自身の客体でもある」と主張しているとして、この点に異議を唱える。ブロイトマンは、この「客体」という概念の導入が、不正確さをもたらしていると主張する。

実際には、例えばレールモントフの詩において抒情詩の主体が自問するとき（「なぜ私はこんなにも悲しく辛いのか／何を待っているのか、何を悔やんでいるのか」）、彼は自分自身を客体として少しも見ておらず、客体化されていない別の主体として見ているのだ。まったく同じ事がレールモントフの「釈明」にも言える。

情熱による踏み外しについての  
思い出だけを

---

<sup>36</sup> Там же. С. 147.

<sup>37</sup> Там же.

栄えある名の代わりに  
君の友が人々の間に残すとき...

自分に対する傍らからの視線は、「他者」（主人公）に向けられているようであるが、言葉の正確な意味における客体に向けられているのではない。この詩のパトスは、まさに人間を客体化し、モノ化することができないということにあるのだ。<sup>38</sup>

ブロイトマンのこの主張は、次の段落で展開される M. M. バフチンの議論に立脚している。バフチンによれば、「個我は客体ではなく、もう一つの主体である」。「個我の像（それは即ち客体的な像ではなく言葉である）」。<sup>39</sup>

だがすでに引用したように、ギンズブルクは、「それ〔〈抒情詩の主人公〉〕は、テキストの背後に存在しているだけでなく、プロットの性格づけもなされているが、だからといって登場人物像と同一視してはならない、個我の統一性なのである」と〈抒情詩の主人公〉と個我を結びつける一方で、「レールモントフの抒情詩では、個我は主体であるだけでなく作品の客体、そのテーマでもある」<sup>40</sup>と述べている。またコールマンによれば、〈抒情詩の主人公〉は「主体であると同時に客体でもある。抒情詩の主人公は意識の担い手であり、表現の客体でもある」。<sup>41</sup> たしかにこれらの主張は、〈抒情詩の主人公〉が「モノ化」<sup>42</sup>された客体であるかのような印象を与え、バフチンによる「個我」の理解とは相反するように思われる。

だがギンズブルクとコールマンは、〈抒情詩の主人公〉が客体的であると言っているのではなく、それが作品のテーマにもなっているという点が重要なのである。つまりコールマンが言うところの〈本来の作者〉と〈語り手である作者〉が出来事や情景や人物を見つめ、言葉で伝えるが、自身は作品のテーマではないのに対し、〈抒情詩の主人公〉は作品のテーマであるという意味で、表現の客体であると述べているのだ。ブロイトマンが反例として示しているレールモントフの作品でも、その点では同じはずである。「人間を客体化し、モノ化することができない」というのは別の次元の問題ではないだろうか。

<sup>38</sup> Там же. С. 149.

<sup>39</sup> Бахтин М.М. К переработке книги о Достоевском // Эстетика словесного творчества. М., 1979. С. 326.

<sup>40</sup> Гинзбург. О лирике. С. 150. なおここでの「個我」は〈抒情詩の主人公〉と同義である。

<sup>41</sup> Бройтман. Лирический субъект. С.148. 「 」内はコールマンからの引用。Корман С.Н. Литературоведческие термины по проблеме автора. Ижевск. 1982. С. 9.

<sup>42</sup> Бахтин. К переработке книги о Достоевском. С. 316.

### 3-4. 〈役割的抒情詩の主人公〉

ブロイトマンが記しているように、〈作者〉と対極にある〈主人公〉の位置に最も近い、あるいは重なっている主体は、〈役割的抒情詩の主人公〉だ。その例としてブロイトマンもまたネクラソフの「カリストラート」と「緑のざわめき」を挙げている。また歴史的・伝説的人物の例としてブリュソフの「エサルハドン」とソログープの「ニュルンベルグの刑事」、男性詩人の詩における女性の《私》として、プーシキンの「我が妹の庭園」、あるいは逆に女流詩人の詩における男性の《私》として、ギッピウスの作品が示されている。このように自分とは異なる性の人物像を作り、それに語らせるというのは、詩ではないが、紀貫之の『土佐日記』もその例に数えられよう。

## 4. ブロイトマンによる〈抒情詩の主体〉の分類の修正

ブロイトマンは、その後〈抒情詩の主体〉の分類に修正を加える。<sup>43</sup> まず〈語り手である作者〉という表現には、本来叙事詩に用いられるべき「語り」という用語が用いられているという理由で、〈作者の意識の表現の主体外的形式 (внесубъектные формы выражения авторского сознания)〉に変更した。<sup>44</sup> また〈本来の作者〉という表現は、作者と主人公の同一視を促すという理由で、〈抒情詩の《私》〉に変えた。

すると、前回の分類での〈抒情詩の《私》〉との関係が問題になるが、上述したようにブロイトマンは〈本来の作者〉を伴う詩と〈抒情詩の《私》〉が登場する詩とを区別するのは困難だとしていたため、この両者を合わせて〈抒情詩の《私》〉としている。

## 5. 抒情詩の主体の分類の問題点

ブロイトマンが指摘しているように、十九世紀に到るまでの文学研究においては、「抒情詩は、抒情詩の〈私〉の直接的な発言であって、結局のところ、多かれ少なかれ、詩人の自伝的発言である」<sup>45</sup> とされてきたし、現在でも素朴な読者は、発話の主体と当の作者

---

<sup>43</sup> Бройтман С.Н. Лирический субъект. // Чернец Л.В. (ред.) Введение в литературоведение : учебное пособие. М., 2004. 本文はインターネット上公表されているものを参照したため、ページ数は不明である。[[www.easyschoo.ru/books/literature/vvedenie-v-literaturovedenie-chernets-halizev/](http://www.easyschoo.ru/books/literature/vvedenie-v-literaturovedenie-chernets-halizev/)] (2018年3月20日閲覧).

<sup>44</sup> А. Г. Бичевинは、コールマンとブロイトマンの用語を踏まえ、さらに「作者の意識の表現の主体外的形式」を「抒情詩の語り手 (лирический повествователь)」に変更した。Бичевин А.Г. Субъектные формы выражения авторского сознания в лирике Н. С. Гумилева («Колчан») // Вестник ИГЛУ. 2013. С. 240. ブロイトマンが批判した「語り手」という用語が用いられているが、ブロイトマンのものよりも簡潔で分かりやすく思われる。

<sup>45</sup> Бройтман. Лирический субъект. С. 141.



とを同一視するかもしれない。そのような抒情詩の発話の主体のあり方には多様性があることを指摘したギンズブルク、またそれらの分類を試みたコールマンとブロイトマンの研究は大きな意味を持ち、抒情詩を鑑賞するに当たってこれを参照したならば、興味深い結果を得られよう。

しかしブロイトマンらの用語には問題点がある。それは〈抒情詩の《私》〉という用語であって、これは以前から文字通り抒情詩の中に現れる〈私〉として理解されていた。

たとえば W. G. ヴェストステインの論文では、「〈抒情詩の主体〉（抒情詩の〈私〉）」という形で二つの用語が併記されている。<sup>46</sup> つまり両者は同等のものとして扱われているのだ。また次のような記述もある。

詩において話し手としても、登場人物あるいは体験の主体としても機能する要素が、ただ「詩人」とだけ呼ばれることがしばしばある。これは、テキスト外にいる作者（経験的作者）と、テキスト内で話している要素（〈抒情詩の《私》〉、〈詩の《私》〉）が同列に扱われていることを示している。そして、テキスト外の要素とテキスト内の要素が用語の上で区別され、後者が〈抒情詩の主人公〉と呼ばれる場合でも、見方は何も変わっていない。〈抒情詩の主人公〉は、作者の意識の表現、あるいは伝記的に対応するために作者と同一視されうる「人物」とであると見なされるからだ。<sup>47</sup>

ヴェストステインは、〈抒情詩の主体〉とは、詩において〈私〉で表現されるものであり、それがテキスト外の作者と用語の上で区別される場合、〈抒情詩の主人公〉と呼ばれるとしている。

ブロイトマンの分類が発表された後も、〈抒情詩の《私》〉は、やはり詩の中に現れる〈私〉として用いられる例が見られる。たとえば M. A. ペレプリョーキンは、タルコフスキーの「子供の頃、僕は病気になった」を分析する際、発話の担い手を指示する言葉として基本的に〈抒情詩の主体〉を用いているが、同じ論文に一箇所次のような記述がある。

---

<sup>46</sup> Willem G. Weststeijn, “Лирический субъект в поэзии русского авангарда,” *Russian Literature* XXIV (1988), p. 235.

<sup>47</sup> *Ibid.*

この文の内的な構造について語るならば、それは先行する文よりも一層複雑である。この複雑さとある種の混乱は、〈抒情詩の《私》〉以外に、さらにもう一人の登場人物——母親が現れるという状況によって強められる。<sup>48</sup>

ここでの〈抒情詩の《私》〉は、詩のテーマとなっている病気になった〈私〉であり、プロイトマンの用語でのそれではない。

O. A. ツァリョーヴァも、タルコフスキーの幼年時代をテーマにした詩を取り上げ、〈抒情詩の主体〉と〈抒情詩の《私》〉を次のように解釈している。

〈抒情詩の主体〉は、追憶に捕らわれた人間である。つまり彼は自分が描写している状況を見下ろす位置にいて、その構想にとって無くてはならない重要な素材を選び出し、過去の出来事を芸術的事実という形に変えながら、遠い過去の出来事を語り、分析している人間である。それはまた少年の仮面をつけた〈抒情詩の《私》〉のこともある。つまり再現された世界を内側から知覚している存在である。<sup>49</sup>

ツァリョーヴァによれば、〈抒情詩の主体〉は、幼年時代の記憶を詩という形にしている作者としてのタルコフスキーである場合もあるし、作品内に描かれている幼いタルコフスキーの場合もあるが、後者を〈抒情詩の《私》〉という用語で指示しているのである。

## 6. 結語

「作者」、「主人公」、「語り手」という用語が一般的に用いられ、その語り手の様々なタイプについて多くの研究がなされている物語論と異なり、抒情詩は、十九世紀まで、〈抒情詩の《私》〉の直接的な発言だという考え方が支配的だった。二十世紀に入ってはじめて文学研究は経験的作者と、抒情詩に現れる人物像を区別するようになった。ギンズブルク、コールマン、プロイトマンらは、この人物像の現れ方の多様性に着目し、後者二人はその分類を試みた。繰り返すが、これは抒情詩を詩人によって構築された作品世界として捉えて研究することによって極めて有意義である。

ただし用語に関して、とりわけ〈抒情詩の《私》〉については研究者によって幅広い意味で用いられているというのが現状だろう。

---

<sup>48</sup> *Переplёкин М.А.* Стихотворение Арсения Тарковского «Я в детстве заболел...» и его роль в апокалипсическом сюжете «Ностальгии» Андрея Тарковского // Известия Самарского научного центра Российской академии наук. 2010. № 3-2. Т. 12. С. 497.

<sup>49</sup> *Царёва О.А.* Тема детства в лирике Арсения Тарковского // Филологические науки. Вопросы теории и практики. 2015. № 7 (49). С. 200.